

「笑顔の奇跡」という華を咲かせよう

廣田 竜士さん

エメラルド色にそびえる美しい山、凜と澄み渡る碧い空、鮮やかな民族衣装。そして、笑顔あふれる子どもたち。その絵が目に飛び込んできた時、安堵と喜びの感情が湧き上がりました。絵は「笑顔の奇跡」に包まれていたのです。

僕は、小学校六年生の時に「国際アートプロジェクト」という企画に参加し、ナイジェリアの小学生と交流しました。その企画は外国の小学生と一つの絵を共同で完成させるというものでした。楽しく進んだ交流の半ばでナイジェリアに内戦が起こり、通信が途絶えました。僕の心の中に去来する行き場のない怒りと悲しみ。命の危険と隣り合わせで生きる仲間にも一歩でも近づきたいと、ナイジェリア大使館に問い合わせました。メディアから伝えられた情報は残酷で目を覆いたくなるようなものばかり。誘拐・人身売買・捻じ曲げられた思想や教え。何よりも戦慄が走ったのは、誘拐された少年たちが兵士として戦地に送り込まれ、正義の名の下に戦争に参加しているという悲しい現実でした。

通信が途絶えて何ヶ月かが経った頃、僕たちのもとに、ナイジェリアから大きな荷物が届きました。それは完成した一枚の絵でした。僕たちが描いた富士山やスカイツリーや舞妓さんの横に、ナイジェリアの美しい風景と笑顔の子どもたち。そこには、死に神のペールに包まれた内戦の現実とはかけ離れた、「国を超えた仲間との平和の礎」がありました。「この活動が、世界を動かす一つの力となる」と心揺さぶられた一瞬です。

中学生となった僕は、世界の現状を自分の目で確かめるべく、戦場で活躍するジャーナリストとの交流や、途上国のチャリティーバザー、地域の人道支援フォーラムなどに積極的に足を運ぶようになりました。そして、先入観に翻弄されることなく「真実を見つめる眼」を忘れてはならないと実感しました。

僕の家には「奇跡の募金箱」があります。日々の生活の中で、笑顔になった小さな奇跡を見つけた時、家族で募金します。そして、そのお金は今日を生きることに困難な、紛争地域への教育支援にあてています。この思いが世界のどこかに辿り着き、小さな芽を出していると思うと家族の絆も深まります。

僕は将来、教育者として戦地で傷ついた子どもたちに学ぶ喜びと、夢を持つことのすばらしさを伝えていきます。戦う教えではなく、生きる幸せを両手いっぱい抱えることのできる教育に生涯をかける決意をしています。

「笑顔の奇跡」という大きな華を咲かせよう。世界というフィールドで・・・